『アマースト大学の体育』における体育論 の体育思想史的考察

——Phycical Culture の概念を中心として——

杉 本 政 繁 (福井大学)
(昭和53年5月17日 受付)

Physical Education as Seen from the Viewpoint of Physical Education Thoughts in "Physical Culture in Amherst College"

Masashige Sugimoto*

Abstract

"Physical culture in Amherst College," prepared by Nathan Allen at the request of the trustees of Amherst College, which first established the department of physical culture in the United States, makes us notice, when we read it from the viewpoint of physical education thoughts, the following three points :

(1) Amherst College has these as its aims of physical culture, (a) "to facilitate, in the highest degree, mental culture" and (b) "to prevent disease." The college seems to have thought that physical culture should aim at "a good health of the whole body" for "a higher order of efficient study and intellectual life." This idea seems to have been influenced by a evangelical view of the body.

(2) The concept of physical culture in this report is used as the purpose of physical culture is "to a good health of the whole body," and it has as its methods, (a) teaching to the students Hygiene including some general knowledge of Anatomy and Physiology and (b) making them have a gymnastics.

(3) Amherst College has "Elocution" under the category of physical culture.

These three points would give a new significance to the history of thoughts on physical education, because they have never been mentioned.

(Masashige Sugimoto : Physical Education as Seen from the Viewpoint of Physical Education Thoughts in "Physical Culture in Amherst College" *Jap. J. Phys. Educ.*, Vol. 23, No. 4, March, pp. 305~314)

* *Fukui University, Faculty of Education Bunkyo, Fukui-shi, Fukui (910)*

I 序 論

1860年、6月に開設されたアマースト大学の体育科^{注1)} (The department of physical culture) における体育論の研究については、A. Weston: The making of American physical education²⁸⁾, D.B. Van Dalen ら: A. World History of Physical Education²⁸⁾, F. E. Leonard: A Guide to the History of Physical Education¹⁴⁾, 及び E.C. Nichols: Physical Education at Amherst²⁰⁾ 等や我が国との関連では、今村嘉雄「学校体育の父リーランド博士」¹⁰⁾, 能勢修一「明治体育史の研究」, 木村吉次「アマースト大学の体育 (Physical Culture) に関する一考察」¹¹⁾ 等の諸研究がある。これらの研究は簡潔に言えば、A. Weston, D.B. Van Dalen, C.W. Hackensmith⁶⁾, E. M. Hartwell⁷⁾ 及び W.D. Hyde⁹⁾ は、主にヒッチコックの業績に焦点をあてた研究であり、F. E. Leonard, E. Rice²³⁾ や Nichols は、アマースト大学の考え方に触れているものの主として事実史的特徴を示した内容紹介に留まっており、また今村、能勢は、主にリーランド通じてのアマースト大学もしくは体操伝習所の体育論であり、木村は、本研究で使用する “physical culture in Amherst College” by Nathan Allen, M. D., prepared by the request of trustees, 1869 (以下『アマーストの体育』と略す) を駆使して保健体育の構想、体育の必修制、軽体操と重体操の3点から紹介、考察を行なっている。けれども、これらの中には特に体育思想史的視点から、アマースト大学の体育科に焦点を当て、そこでの “Physical Culture” の概念を中心に考察を加えたものはほとんどなかった。そこで筆者は、この点に注目して、我が国では、あまり知られていない上述の資料^{注2)} を使用して、その意義を問いたいと考え、この研究を取り上げることにした。

本論文の構成は、以下の通りである。

1. 時代背景とアマースト大学の概要
2. 『アマーストの体育』の概要と要約
3. 『アマーストの体育』における体育思想史的意義の考察

II 本 論

1. 時代背景とアマースト大学の概要

アマースト大学に体育科が創設された1860年は、南北戦争(1861~1865)が始まる前年であり、一般に北部によって奴隷解放の実現、アメリカ統一の回復・強化及び産業資本の拡大等が企図されていた時期である。しかし、いわゆる大学体育の先導的役割を果たしたとみられるアマースト大学の体育概念を主に考察するに際しては、更に次の2点を配慮しなければならない。第1点は、当時は、教育思潮の点からみると、体性、知性及び徳性の調和的発達を目指すペスタロッチ(J. H. Pestalozzi, 1746~1827)のいわゆる三育主義に近い考え方が普及していた時期²⁷⁾であり、更にこの思潮が、「アマースト大学の最後のピューリタン」^{注3)}と言われ、神の恩恵にあずかるための「業の契約」を重視したスターンズ大学長(1854~1876在任)の福音主義的教説(Doctrine)^{注4)}と微妙に重複する思想であった点である。第2点は、この時期の体育分野の傾向が、1812年の米英戦争の頃から南北戦争の間の凡そ50年間に諸外国から紹介、導入あるいは変形された種々の体操や運動が散在して、方式を競う、いわゆる「方式論争」Battle of System²⁹⁾の時期と言われる点である。すなわち、師ヤーンのツルネンをアメリカに伝え、活躍したベック(C. Beck, 1798~1866)、リーバー(F. Lieber, 1800~1872)等によるドイツ体操、ビーチャー女史(C. E. Beecher)が考案した整容体操 calisthenics、筋力を重視するウインシップ(G. B. Winship)方式の重体操、ドイツ体操に対抗して整容体操とスウェーデン体操との特色を結合したルイス(Dio Lewis, 1823~1886)の新体操²⁹⁾、さらにペスタロッチの影響を受けたフェレンベルク(P. E. Fellenberg, 1771~1844)によって広められた手工労作学校方式が、植民地時代以来民衆の支持を得ていたスポーツとは別に、未だアメリカ独自の方向性を見い出せずに模索していた時期であった。このように一般的に言われることが時代背景として特色づけられる。

こうした時代背景のもとで、1821年9月、ボス

トン市の西方約160kmにあるアマースト市にロード、J・アマーストやノア・ウェプスターらの援助によって神学校^{3)5)注5)}として設立されたアマースト大学に、体育科が全米体育史上初めて登場し、その8年後の1869年に、本研究で取り上げる『アマーストの体育』が作成されたのである。

2. 『アマーストの体育』の概要と要約

我が国では、『アマーストの体育』は、リーランド (G. A. Leland, 1850~1947) によって紹介された一部¹⁶⁾を除いて、一般にはあまり知られていないので、まずこれの基本的構成を概観することにする。

本書は、1869年にN・アレン, M. D. がアマースト大学評議会の要望で作成したものであり、1860年に同大学に全米最初の体育科が開設されて以来、8年間にわたって貫かれた体育理念とそれに規定された内容、成果及び意義を、世界に誇れる全米最初の試みであるという自負をもって¹⁾まとめたものである。

本書の構成は、I 緒論 (3~6頁)、II 計画 (6~11頁)、III 歴史 (12~22頁)、IV 成果 (22~29頁)、V 利点 (30~37頁)、VI 重要性 (37~40頁) 及び附録 (「疾病表」「活力表」「体育館規則」等) (41~46頁) からなっている。

次に、この『アマーストの体育』の内容を以上の章区分に従って要約する。

I 緒論——本章では、まず4代学長¹⁵⁾スターンズの教育・体育観を中心にアマースト大学に体育科が創設されるまでの経緯が述べられる。創設の動機については、学長の学生の健康に対する強い関心によることが、1854年の学長就任演説や1858年の評議会報告等から明示される。つまり多数の学生は、農場や機械工場等の活発な労働から、大学の座りがちな勉学生活へと変わり、それに伴って健康状態が悪化し、最悪の場合には死亡者が出る。こうした事態に対し、体育は唯一の予防手段ではないが、予防手段の最も有効なものであり、もし毎日身体運動が学生に課されるならば、単に生命や健康が保持されるだけでなく、一段と高度な勉学態勢と知的生活とを保障することを確信する(4頁)と彼は説く。この点は、以後の体育科のあり方を規定する重要な点である。この発意に

よって、評議会の協議を経て、1860年、バレット体育館と称するペルハム花崗岩造りの縦72フィート、横50フィートの2階建て体育館が新築されることになる(5~6頁)のである。

II 計画——次は、当然専門委員会によって、当学科のあるべき「一般規則」や必要な「体育教師像」が構想、立案されることになる。

まず前者については、(1) (当学科の) 主要な目的は、敏捷性、強靱さあるいは筋力のいる技ではなく、全身を善き健康に保持すること。(2) 全学生は、原則として週に少なくとも4日間、一日に30分の定時に体育に出席すること。(3) 教官は、学生の暴力的行為や極端な活動を制止し、努めて部分運動ではなく、全身運動をさせるように注意すること。(4) 体育館では、知的学科のような優劣を記録する必要はないが、学生の態度等は詳記しておく、各学生の等級を決める際には注意深く配慮すべきこと。(5) 正課時間外には、各学生に随意的な運動を許すが、ボウリング場は、定時の外は使用禁止とする。また随意的な運動であっても教官の指揮を受けること。(6) 体育館は日没前に閉鎖し、館内での電灯の使用及び喫煙等は禁止であること。(7) 教官は、同大学の正教官となり、学科に自己の業績を提供し、また他の正教官のように大学の指揮を受けること(6~7頁)と立案され、後者の体育 (physical education) 科(7頁)の教師像については、(1) 熟練した体操家で、クラスを管理出来る人。(2) 医学に精通し、病理を知り学生の疾病、健康を鑑別し、健康法を守っているか否かを観察し、それを留意忠告できる人。(3) よく雄弁法 (Elocution) を心得、身体、肺臓、発声器官の運動を教授でき、さらに体育館を管理するだけでなく、身体保全に必要な生理学も教授し、人柄は高志あるクリスチャン精神を有する人。(7~8頁)が立案される。次いで、この教官の名称が「衛生・体育教授」(The Professor of Hygiene and Physical Education)と決定されたことが述べられる。さらに本章では、この教授の指導で、身体の適切な発達という重要事が他の知的学科と同じ地平で企図される必要があることを、手工労作学校の成果を踏まえて論じられる。(10~11頁)

III 歴史——本章では、IIの立案に基いた人選の

経緯と専任教授の所感、具体的な実技内容及び大学体育の考え方、等が展開される。人選の経緯については、1860年に初代の教授としてフッカー博士が任命されたが、病気のため2年後に他界したこと、南北戦争開始に伴って、1861年、リーマン陸軍大佐が非常勤で雇われたこと、そして同年8月にヒッチコック (E. Hitchcock, 1828~1911) 博士が後任教授となったこと (12頁) が示される。次いで、ヒッチコックの当体育科のあり方に対する共鳴の所感を紹介した後、彼の体育授業の内容が描出される。すなわち、各組は、各々ユニフォームを着て1階に整列し、時には美しい歌を合唱しながら、キャプテンの指揮に従って2階ホールへ行進して上がる。教授によって出欠・品行が記録され、続いて各組の成員はホール中央に集まり〈マホメット教信者以上の熱意を持って〉 (14頁) 協力一致して啞鈴、インディアン棒を使用した体操を行う (14頁) のである。次に大学体育のあり方に関しては、どの種類の運動が最高であるかという問題に答える形で示唆される。つまり、要は追求する目標次第で、アクロバット選手や拳闘家を目指すのであるならば、食物の量や質を配慮しつつ、特別な筋肉を長時間訓練すべきであるし、また病弱者が健康回復を希求するのであるならば、運動療法 movement cure が適当であると答え、大学体育のように、精神活動と両立できる身体の健康を目指す場合、短時間ではあるが、毎日規則的に運動をさせ、かつ基本的には全身を使う軽体操 (light gymnastics) がよいと説く。 (16頁)

IV成果——ここでは、前述した言わばアマースト式体育の成果が7点にわたって披瀝される。1~5点は経験的観察による。

第1点は、身体面の効果である。従来の学生には病人のような血色の悪い容貌を観ることが多かったが、今日では健康色の顔面をしており、その容貌が身体健康を示している (22頁) と言う。第2点は、姿勢や態度に関する効果である。体育受講以前には、関節の硬直、不器用な手足の使用、前屈みの姿勢及び固い表情等の特徴があった学生が、体育によって優雅で品位のある熟が身につく、また会話等の際にも高度な意志表示が出来るようになった (23頁) と述べる。第3点は、言わば社会性育成に関するものである。学生が協力一致して、同時に、同環境で、同運動を正確に最後までやり通す共通体験は、精神的な人間的思いやり、快活さや陽気さを培い、仲間の絆の育成に役立った (24頁) と言う。第4点は、病気に対する予防効果である。体操運動 (gymnastics exercise) によって、風邪、頭痛及び高熱等の疾病は皆無に等しくなり、学生に多い消化不良、神経痛及び肺病等の疾病もほとんどなくなる (24~25頁) と言う。第5点は、次の、6、7点の「疾病表」 (statistics of disabilities) の分析の導入として、今の学生の健康状態と10~15年前のそれを比較すると、今日では病弱者の死亡や病気による退学は非常に少ないと述べる。さて第6点及び第7点は、1861年から記録された「疾病表」により、第5点の指摘が確認される。1861年には流行伝染病によって、2日以上続いて欠席した学生が25名~60名に達したが、この突発的な伝染病を除くと、実質的に減少したこと (26頁)、また8年間の各組の「疾病表」から、4年生の病弱者数と1年生のそれとを比較すると、1年生のそれは3倍以上の値を示したが、これは新入生が未だ3~4年生のような健康法を修得していなかったためであると

表1 活力表——8年間

	年 令	身 長 (cm)	体 重 (kg)	胸 囲 (cm)	肺 活 量 (cc)	腕 囲 (cm)	筋力テスト (回数)
4 年 生	23.048	172.5	66.188	93.400	4044.875	29.738	11.36
3 年 生	22.329	172.5	63.502	91.259	3878.125	29.865	10.85
2 年 生	21.241	172.6	63.493	91.373	4078.18	29.433	9.98
新 入 生	20.275	172.3	59.892	91.196	3738.87	28.945	8.85
平 均 値	21.723	172.475	63.265	91.804	3934.75	29.612	10.26

(feet, pounds, inches, cubic inches をそれぞれcm, kg, cm, cc に筆者が換算した)

し、貧弱な体質で入学した学生も、3～4年生になると健康になり、不健康のために1～2年生で退学することは極めて少ない(27頁)と説明する。(表2参照)第8点は、疾病表同様1861年以来実施された9項目からなる「活力表」(vital statistics)について述べられる。この中で特に「身長」「体重」については、ケトレー、ゴウルド及びマクラレーンとの数値の比較²⁾がなされている。まず、これの実施回数は、初年度2回、その後毎年1回実施され、検査項目は、年令、体重、身長、胸囲、腕囲及び前腕囲、肺活量、呼吸力(power of expiration)及び簡単な筋力テストである。(表1参照、但し本表では7項目のみ挙げてある)しかしこの検査は新しい領域なので、特別の成果は指摘出来ないが、ただこの8年間の「活力表」から、入学時と4年時との比較をみると、腕囲と胸囲の拡大と肺活量と呼吸力の増加が観られると指摘する。体育実施に伴う学力への影響については、学力の採点方法等が数年来変化しているので、正確には比較出来ないが、全クラスの学力の総計は、従来よりも現在の方が向上していると確信する(28～29頁)と述べる。

V利点——このVはIVの補足的性格が濃いもので、6点から論じられているが、整理すると(1)～(5)は、体育による心理面に与える利点が主に論じられ、(6)は当時のスポーツの長所、短所の分析を通じて、大学体育との比較が展開される形をとっている。

まず前者を観ると、「健全な肉体に健全な精神」という格言の実行を企図するには、体育以外に方途がない点から説き始め(30頁)、体育は、独立独行 self-reliance の感覚を創出する利点があるこ

と、青年の性格の特徴である過度な獣心の安全弁の役目を果たすこと、偏った部分運動の調整力となること、等が述べられる。最後に、アマーフト大学では、規則的体操方式によって、生命と健康を保持するのは、神の神聖な訓令「汝、害するなかれ」do thyself no harm に基づいている(32頁)からであると説かれる。

後者については、散歩、乗馬、スケート、クリケット、野球、ボート等を挙げ、次のように長所短所が考察される。まず散歩は、筋肉の大部分を使用でき、出費が不要で、屋外で自由に行なえるが、心の楽しみを満たさない。(33頁)乗馬とスケートは、愉快的な運動であり、健康や気晴らしのためには適しているが、出費が高み、季節と天候の限定を受け、規則的系統的に実践し得ないので学生には不向きであると言う。クリケットやクロークは、子供や婦人に適しており、さらにキャリセニクスは、彼らに最適である(34頁)と説く。国民的ゲームとなっている野球は、身体全体の運動なので健康と体力の両方を助長するので有益であるが、試合になると観客の異常な興奮と賭けとによって、勝利至上主義に陥り、また過度の興奮状態で暴力的となり、その結果血液循環が異常になり心臓や肺臓の充血を起すことが多く、さらに野球は天候に規定され、広いグラウンドを要する点で、体育科の意図に適合しない(34～35頁)と言う。最後にボートであるが、これは精神力が強固になり、特に足、腰及び背中の筋肉が増強される反面、心臓病や肺病の最も顕著な原因の1つになると指摘し、外科医スケイ等の考えを引用しつつ、今後はたとえ名誉の追求のためであっても、科学的原理に基づいて実践されると有益になるう

表2 疾病表——8年間

	大学の平均 学生数	各学年の平 均学生数	各学年の平 均病弱者数	各学年の病 弱者の比率	全学の病弱 者の比率的 数値	病気のリス ト上の平均 人数	病弱者が一 日休む平均 値	全学で数日 欠席するも のの平均値
4年生	224	48.500	5.625	1.8～0.119	1.45	38.250	11.756	2.211
3年生		52.375	8.571	1.6～0.160	1.28			
2年生		61.250	12.125	1.5～0.197	1.18			
新入生		61.875	14.375	1.4～0.232	1.16			
平均値		56.000	10.174					

と示唆する(35~37頁)。

VI重要性——最後に本章では、IIで示された「強靱な体力ではなく、全身を健康に保持する」ことを目標とする体育の重要性の根拠が論じられる。それは、精神の改善と体育との間には親密で必要な連関が認められるからであると言う。つまり身体を健康を強く要望するのは、知的文化(intellectual cultur)を形成する精神に、それが強い影響を及ぼすからであるとする。 (37頁) だからもし良好な身体的状態によって、知的文化が裨益され、その大部分が支配、制御されているとしたならば、本書で主唱された体操方式が、高等普通教育 liberal education 課程にとって最重要であるからである(39頁)と説く。そしてこれを果たすことは、神学上から観ると、最後の審判の日(the great day)のために神から授かった神聖な責任(身体・知的才能及び学識の保護、増進)を果たすこととほぼ同義になろうと述べて(40頁)本書を終えるのである。

3. 体育思想史的意義の考察

米国で最初に創設されたアマースト大学体育科の体育 physical culture (以下 P.C. と略す)を体育思想史的に解明するに当って、ここでは便宜上、(1)その目標、(2)方法、内容—体育教師の資質—の2点に分けて考察し、その考察結果に基づいて、(3) P.C. の概念を論究したい。

(1) 体育の目標

我々は、IIですでにアマースト大学体育科が、福音主義的教説を唱えたスターンズ学長の指導によって設立されたことを観た。その大学の体育を考察するのであるから、まず起点として福音主義的な身体観から考察を初めるのが適当と思う。『アマーストの体育』では、次のように言う。

「我々が欲望にまかせて虐待している身体は、実は我々の所有物ではない。身体は我々がそれぞれ最後の審判の日に、知的才能(mental talents)や学識と同じ程度に善き使い方や養護をするために神から授かった神聖な責任なのである」(40頁)

すなわち、身体($\Sigma\omega\mu\alpha$)は靈魂の墓場($\Sigma\eta\mu\alpha$)なりと考える禁欲的な精神主義¹⁸⁾と捉えるのではなく、身体の善用、養護を知的才能や学識と同

等に神からの神聖な責任として捉えていることが明らかであろう。そして身体の善用養護が必要な理由として、本書では「精神が多くの場合、胃や肝臓や消化器官の状態に強く影響を受けることは、周知の事柄であり、実際、精神に影響を及ぼさない身体器官の病的あるいは異常な状態はほとんどない。」(38頁)と説く。このように観ると、福音主義的な身体観¹⁶⁾は、正常でない身体状態が精神の正常な機能を妨げるから、身体的配慮が必要だと観ていると言えよう。

さて、我々はすでにIIで体育の目標が「敏捷性、強靱さ、あるいは筋力のいる技ではなく、全身を善き健康(good health)に保持することにあること」を観た。この筋力逞しいスポーツマスの育成ではなくて、善き健康人を目指すと言う概括的な体育目標が、上述の身体観と無関係でないことは、good health という名辞からも窺えるが、この身体観との関連で具体的な体育目標を知るためには、さらに次の箇所に注目しなければならない。

「今や体操の主要な目的は、さしあたり知的修養を最高の等級にまで助長することと同時に、もし無視すると、様々な病気になることが避けがたい病弱の原因を、適切な指導によって、初期の病状でチェックし、病気を予防することにも資することである」(38頁)

この引例は、すでに観たように、スターンズ学長の「体育は予防手段の最も有効なものであり、もし毎日体育が課されるなら(中略)一段と高度な能率的勉学態勢と知的生活を保証すると確信する」という報告内容と対応し、この信念に裏づけられたものと推断出来るが、整理すると、体育(の手段である体操)の目的は、(1)知的修養の助長、(2)病気の予防、となる。換言すれば、これは身体育成のための体育ではなく、より養き精神活動に資する身体を健康のための体育であったと言えると思う。

アマースト大学の体育目標が、このような形を取ったのは、恐らく福音主義の一般的な主張、すなわち、神の恩恵は、聖書の言葉を通して示される。聖書の言葉を正しく理解するためには、知的修養が重要である²²⁾、と言う考え方と密接不可分

な結果であったと推察される。が、それはともかく、全米最初の大学体育の目標が、上述のようにより善き精神活動を支える基礎と考えられていた点は(1)の冒頭で述べた福音主義的な身体観の影響を窺わせるに十分な体育目標であり、体育思想的に着目すべき点であると思われる。

(2) 体育の方法・内容—体育教師の資質—

(1)で我々はアマースト大学の主要な体育目標が、「より善き精神活動を支える身体の健康」であることを考察した。次にこの目標を具体化するための方法、内容を考察しなければならないが、この問題は、この大学の評議会が、体育科創設に当って、その目標を具体化する体育教師に何を期待し、義務づけたか、という問題に規定される。そこでここでは、この点に焦点を当てる。

『アマーストの体育』では、次のように明記されている。

「当大学に体育科を創設するに当って、担当教授の義務は、以下の通りとする。第1——体育館を管理すること。また体操を学生に教授すること。第2——学生の一般的な健康を監視すること。また学長が報告書で述べた一般計画に従って（内容の概要で示した）方策を考え、その目的で教授すること。（中略）第3——雄弁法が身体訓練と関連している限り、これを教授すること。第4——担当教授には、適宜、衛生学、体育、つまり解剖学や生理学の一般的知見を含めた生命、健康の法則に関する話題を講義させる」（9頁）

以上、評議会が体育教師に要望した資質を要約すると「体育館を管理する有能な体操家かつ学生の健康を管理する医師という2側面を統合的に実践出来る教師」となろう。そして、この教官の職名が、すでに内容の概要で明示したように、その内容面から「衛生・体育教授」と決定されたのである。このように観ると、アマースト大学では「健康」と言う目標を達成するために解剖学や生理学の知見に基づいた（第4）「衛生学」と（第1）「体操」とを方法・内容とする考え方を持っていたことが明らかであろう。この、「衛生学」と「体操」とを手段とするという体育概念が、明治11年に我が国に導入され、体操のみが偏重され

ていった経過は、木下の研究¹²⁾で詳しく論究されている。

ところで、この体育教師の資質に関して、さらに注目すべき点がある。それは、第3に「雄弁法」の教授を義務づけていることである。つまり身体の健康を目標とする体育に、精神面の表現である雄弁法を義務づけているのである。なるほど身体全体の調和的発達を目指す規則的な軽体操実践の結果として「肺臓」や「発声器官」の訓練になる可能性は強いにせよ、いわゆる雄弁法には絶対にならない。この点については、実際、リーランドは「（アマースト大学では雄弁法を教授することになっているが）能弁法（雄弁法）モ体操ノ一課トシテ授クルニ非ズ。唯能弁家ニ要用ナル健全強大ノ身体ヲ以テ目的ト為スニ止ルノミ。（中略）能弁法及ビ講論法ノ精美ナル諸科ノ如キハ、別ニ修辞学、能弁学ノ科アリテ之ヲ教授ス¹⁷⁾」と述べており、少なくとも1870～1874年には有名無実であったことを指摘している。だが、ここで大切な点は、アマースト大学の体育科が実際に雄弁術を行なったか否か、ということではなく、体育目標をより善き精神活動を支える健康と捉えた同大学が、体育の可能性をどのように考え、どのように具体化しようとしたのか、と言うことである。この意味で、最初の大学体育に「雄弁法」^{注7)}が考慮されていた事実は、体育思想史的に観て興味深い点であると言えよう。

なお、この雄弁法とは直接関係はないが、雄弁法の一部と考えられる「発声法」を体育教科の1つであると考ええる立場は、同大学の体育科創設に一年遅れて設立されたルイスのボストン体育師範学校²⁴⁾やサージャント(D. A. Sargent, 1849～1924)のハーバード大学²⁵⁾での教科に観られる考え方であり、アマースト大学の「雄弁法」も実質上この程度のものであったと推察される。こう観ると、今日ではほとんど考慮されない「発声法」が、19世紀中葉においては、体育教科の一つとして考えられていたことが、特徴の1つとして挙げられると思う。

(3) Physical Culture の概念

これまでの考察によって、アマースト大学における体育の目標、方法及び内容が明らかになった

と思われるが、しかし『アマーフトの体育』では、P.C.の名辞の他にPhysical education（以下P.E.と略す）の名辞を使用している所が数箇所ある。そこでP.C.の概念を論究するに際して、まずここでは両者の使用方法を観ることにする。

まず、「体育科」を表現する名辞としては、(I)緒論(3頁)と(II)計画(9頁)において、A. Department of P.C.と示し、同じ(II)計画7頁)では、A Department of P.E.が用いられ、教授職名を示す「衛生・体育教授」と言う名辞には、The Professor of Hygiene and P.E. (6. 10. 12. 20頁)が統一的に使用され、さらに「体育史」を示す名辞には、The History of P.C. (10頁)の語が当てられている。

この点については、すでに(1)(2)の考察から「P.C.」は「衛生」と体操を手段とする「P.E.」とから構成されていたことが明白であるので、P.E.は、体操等の実践的側面に用いる名辞として使用されていると断言出来る。これは言わば、前者が広義の体育であるのに対して、後者は狭義のそれであるとも表現出来ると思う。History of P.C.は、この意味で広義の体育の歴史を指すことが、内容の概要の(III)からも容易に理解されよう。問題は、テキスト7頁で使用されたDepartment of P.E.である。これは上述の一貫性のある用語法から推すと、極めて異常であり、本書の標題からしても完全に非論理的問題を生起させてしまう。そこで筆者は、この問題をアレンの概念理解の混乱によるものではなく、誤植であると解して、P.C.とP.E.の両者の使用法の差異は、上述の広・狭の意味と捉えるのが妥当であると考え。

それはともかくとして、1869年に提出されたこの『アマーフトの体育』においては、P.C.と言う名辞が使用されたことだけは明瞭である。この点は、R.I. エリオットが1887～1925年の間のP.C. Physical Training 及び P.E. と言う名辞の大学における使用数の調査¹⁹⁾によって、P.C.は1887年から用いられ始めたとする報告に対して、アマーフト大学では、少なくとも18年前の時点でP.C.を使用していたことを明示するものであり、事実史的に留意すべき点であると思う。

さて、これまで3点から考察を加えてきたが、

以上によって、今日では「身体文化」と訳され広義の体育概念¹⁸⁾として捉えられているP.C.と言う名辞が、19世紀中葉のアマーフト大学においては、福音主義的な身体観の影響を窺わせる「知的修養の助長」及び「病気の予防」を主眼とするより善き精神活動を支える身体健康を目標とし、「衛生学」と「体操」とを方法とする概念で使用されていたことが明瞭になったと思う。このことは、12年後の1881年のヒッチコックの報告¹⁹⁾によっても確証し得るが、それは別にしても、全米で最初に体育科を開設し、いわゆる大学体育に先鞭をつけたアマーフト大学におけるP.C.の概念が、以上のような意味、内容を有していた点は、これまでほとんど注目されていなかった所であり、体育思想史的にみて有意義なものと言えると考える。

III 結 語

以上、筆者は、『アマーフトの体育』における体育思想を3点から考察してきたが、その結果次の点が明らかになった。

(1)アマーフト大学体育科では、体育の目標を知的修養の助長と病気の予防とに主眼を置いた、言わば「より善き精神活動を支える身体健康」を目指すものと捉えている。従って、ここには福音主義的身体観の影響が窺える。

(2)同大学におけるP.C.の名辞は、(1)の意味の「健康」を目標とし、解剖学と生理学とに基づいた「衛生学」と「体操」とを方法とする概念として使用されている。

(3)雄弁法が、体育の範疇で把握されている。

以上の3点は、これまでほとんど指摘されなかった点であり、体育思想史的に有意義なものと考え。

注記

注1) 1881年のヒッチコックによる評議会報告では、the Department of Physical Education and Hygieneと記してあるので、1869年以降に学科名の変更があったと観られる。

注2) この資料は、中京大学の木村吉次教授の御好意により入手したものである。

注3) ピューリタニズムは、教会の教派の上からは「改革派教会」もしくは「長老派」と呼ばれ、いわゆる

カルヴィニズムも含めた福音主義に立つ。1820年にピルグリム・ファーザーズとしてその思想がアメリカに移植され、ニューイングランドを中心に定着した。しかし同地では、これが三派に分かれていた、すなわち国教会内の改革を主張する「長老派」とそれからの分離を主張する「分離派」及びその和合を企図する「会衆派」である。スターンズ学長は、この「会衆派」に属し、カルヴィンの予定説を排する姿勢をとっていたと伝えられる。(Fuess, C.M., Amherst, The Story of New England College, pp. 148~160. 参照)

注4) 彼は就任演説の中で「青年紳士よ、君の最高の学識は神に対する正しい関係の学識であり、宇宙秩序を伴った和合の学識である。そこには1つの偉大で本質的な生命がある。その呼動は全ての創造された世界を打ちつつある。深いすぐれた学識に加えて、高い道徳、社会的卓越及び賢明な身体の自己制御を伴うならば、君はこの偉大な生命を有する調和をもらい受けるであろう。(中略) そうして君は真に教育されるであろう」と説いている。(Fuess, C.M. *ibid.* p. 155)

注5) 本学の卒業生には、リーランドの他に同大学の学長を務め、我が国では「青年よ大志をいだけ」の格言で有名なクラーク博士、さらに日本でキリスト教を広めた同志社大学の創設者、新島襄や内村鑑三がいる。

注6) 福音主義とは、本来、「魂の救済」に力点を置き、伝承、律法、儀式と言った客観的な権威を主張するカトリック教会に対して、聖書の福音の真理にたちかえり、キリストによって神より恩恵として与えられる信仰を主張するプロテスタント(ピューリタンも含む)的信仰の意であるが、アマースト大学では、この聖書の福音にたちかえる際に「神はすべてを創りたもうた」という一節の「すべて」の中に「身体」を考慮し、「汝、害することなかれ」という言葉の中に身体的配慮の教えを汲みとると言う仕方、福音の真理を理解した、と筆者は解し、福音主義的身体観と表現した。

注7) グーツムーツは、1793年に「青年の体操」の中ですでにこの雄弁法(die Deklamation)について論じている。(J.C. Gutsmuth, *Gymnastik Fur Die Jugend XVII*, pp. 321~24)

引用・参考文献

- 1) Allen, N., Physical Culture in Amherst College Lowell, Mass Stone and Huse Book printers, 1896. pp. 8.
- 2) Allen, N.,: *ibid.*, p. 28~29.

	Hichcock	Quetelet	Gould	Maclaren
平均身長 (フィート)	5. 651	5. 333	5. 666	5. 825
平均体重 (ポンド)	139. 485	136. 933	139. 700	132. 970

- 3) Encyclopedia Americana I, pp. 571~72. American Corporation, U.S.A., 1966.
- 4) Fuess, C. M., Amherst, The Story of New England College, Boston, 1935. pp. 151.
- 5) Fuess, C.M. *ibid.* pp. 8~22.
- 6) Hackensmith, C.W., History of Physical Education, New York, 1966. pp. 364~65.
- 7) Hartwell, E.M., The Condition and Prospect of Physical Education in United States, A.P.E. A. Report, 1892. p. 32.
- 8) Hitchcock, E., A Report of Twenty Years Experiments in the Department of Physical Education and Hygiene in Amherst College, to the Board of Trustees, Massachusetts, 1881. pp. 5~6.
- 9) Hyde, W.D., Physical Education in College, A.P.E.A. Report, 1891. p. 26.
- 10) 今村嘉雄, 不昧堂書店, 1868. pp. 65~76.
- 11) 木村吉次, 日本体育学会第25回大会抄録, pp. 302, 1974. 及び, 日本近代体育思想の形成 杏林書院, 1975. pp. 45~52.
- 12) 木下秀明, 日本体育史研究序説, 不昧堂書店, 1971. pp. 10~86.
- 13) 岸野雄三, 体育史, 大修館書店, 1973. pp. 25~29.
- 14) Leonard, F.E., Connecticut, 1971. pp. 275~78.
- 15) Leonard, F.E. *ibid.* pp. 275.
- 16) リーランド「体操伝習所訓導米人リーランド氏ヨリ同所長伊沢修二ニ呈セル意見書」坪井玄道訳, 教育雑誌, 第94号, 1879において, II計画の7~8頁とIV成果の24~28頁の要旨が紹介されている.
- 17) リーランド, 上掲書(今村嘉雄「リーランド博士」の資料より引用) p. 186.
- 18) 水野忠文ら, 体育史概説一西洋, 日本一体育の科学社, 1967. p. 105.
- 19) 水野忠文ら, 上掲書, p. 105.
- 20) Nichols, E.C., Reserch Quartary, pp. 88~97, 1938.
- 21) 能勢修一, 逍遙書院, 1965. pp. 41~98.

- 22) 大下尚一, 「ピューリタニズムとアメリカ」大橋健三郎ら(編), 講座アメリカの文化」南雲堂, 1969. p. 52.
- 23) Rice, E. A., A Brief History of Physical Education, New York, 1952. (今村嘉雄ら訳, ライス世界体育史, 不味堂書店, 1969. pp. 221~224)
- 24) ライス, 上掲書, p. 186.
- 25) Sargent, D.A., The System of Physical Training at the Hemenway Gymnasium, Physical Training, pp. 73~76, November, 1889.
- 26) Van Dalen, D.B., et al., U.S.A. 1953. pp. 368, 369, 378 and 381. (ヴァン・ダーレンら, 体育の世界史, 加藤橋夫訳, ベースボール・マガジン社, 1969)
- 27) Van Dalen, D.B., et al., *ibid.*, p. 364.
- 28) Weston, A, New York, 1962, p. 33.
- 29) Weston, A, *ibid.*, pp. 24~48.
- 30) Weston, A, *ibid.*, p. 30.